

令和7年度 第3回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和7年8月29日（金）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6－1会議室
- 3 出席者 柴橋市長、伊藤委員、岡本委員、加藤委員、小森委員、益子委員
- 4 招聘者 東京学芸大学 教授 金子嘉宏 氏
- 5 傍聴者 一般2名
- 6 次 第 （1）市長あいさつ
（2）協議
「子どもの発達に応じた学びのシステム」
- 7 議 事

（13時30分開会）

（1） 市長あいさつ

（2） 協議

① 事務局説明

（資料1 子どもの発達に応じた学びのシステム「幼児教育から義務教育修了までの連続的な学びについて」）

② 招聘者講演（金子 氏）

（資料2 未来の学校みんなで創ろう。学校をわくわくする場所に）

③ 意見交換

○加藤 委員

私は医師をしており、発達の凸凹をよく見ているが、先生のお話はまさにその通りで、学力が低い子と高い子が二極化しているのが現状である。指導の個別化についても、ついていけない子どもたちを拾ってあげることが大変重要だ。その子どもたちの自尊心を向上させる意味でも、しっかり見取るということも大事だ。加えて、50点60点を取る山の登り方は、その子なりの登り方に変えないといけない。例えば、視力が悪い子が眼鏡をかけるように、何かが苦手な子にとってそれを行いやすい環境や状況を作ることが大事で、ただ方法を教え込むのではないということもぜひ理解していただきたい。そういった工夫をしていくことで、学校という箱になるということだと思う。

カリキュラムオーバーロードについては、共通テストが難しくなってきたおり、そういった状況の中で、学校はどんどん難しいことをやらなければいけない青天井になってしまっている。その状況と現状の子どもたちのあり方が乖離しすぎていて、日本の教育は、学力の高い子たちを見てその子どもたちをいかにもっと伸ばすかといったようなことばかり強調されているように感じる。そこについていけない子が大半だということを是非理解していただきたいと思っている。それが日本の国力を上げることにもつながるし、このままいくと本当にまずい状況だと思っているので、平均点をあげるのではなくてついていけない子どもたちをどのようにもう少し学びやすくしてあげるかということが大事だと思っている。そのためには、学校が時間通りに終わらなければいけないという状況の中で、プラスアルファの学びをどうやってさせてあげるか。それはやはり先生がおっしゃったように少し時間を作って、得意なことを伸ばすとか、そういった自由度があることが大事だと思う。ただ、読み書き障がいや算数障がいの子を見ている中で、その子たちを支える工夫として少し補助をしてあげるのだが、評価をどうしたらよいかという話が出てくるので、どのように評価していくかが課題だと思う。

幼少中の連続的な学びを実現するために必要な方途については、金子先生の最後のスライドが答えかと思う。私がいつも思うのは、幼稚園は金子みすゞさんの「みんな違ってみんないい」ということが掲げられている一方で、小学校に入った途端に学級経営が同じで、皆が同じ方向を向くようにしており、いきなり180度変わってしまう環境を作っているわけであるから、そこを変えなければ連続するわけがない。学びのテーマを同じにしても、そこに連続性がなければうまくいかないと思う。要するに、学習内容に連続性はあるけれども、その土壌に連続性がないとうまくいかない。例えば、わかあゆ学はテーマとしては大変良いと思うが、魚や川を嫌いな子が9年間同じ内容で学ぶとなると苦手な子もいると思うので、別の課題を与える等、自由度があると良い。特に感覚過敏が強い子にとっては、川が気持ち悪いか魚に触れられないことがあるので、そういった子もいるということも是非分かっていただきたい。加えて、ポートフォリオをしっかりと作ることが大事で、その人の軌跡や今までの歩みを教員が把握していることが必要だが、教員は教える人ではなくて伴走者でも良いと思っている。その子に合ったコンテンツを与えることが必要だと思っているので、その子の発達段階はどの程度で、こういった学び方が得意だということを先生が把握して9年間育てていった方が良いのではないかと、そういった形の先生のあり方を考えていった方が良いのではないかと私も考えている。

○金子 氏

ポートフォリオはまさに先ほど述べたように、データ化しないと先生方が各 35 人の膨大な歴史を文章で読むことはほぼ不可能で、引き継ぎをするのにも恐らく限界があるから、一定程度デジタル化して要約化されたものが必要である。もしくは、それを子どもがちゃんと要約できるようにしていくことも自分の事を自分で作る、まさに自己調整学習の一つだと思う。そういった意味では子どもが重要になってくるが、個人としてはテクノロジーを使うべきだと思っている。分厚いポートフォリオが出来たとしても先生は全てを見て理解することは難しいと思うので、理解できる形でどのように作っていくかが重要かと思う。評価に関してはもちろん評価と評定という考え方があって、評定もしなければいけないが、私が伝えたいのはその子が今どのような状況なのか見取ることができるようにしておく必要があるということだ。まさに学校において中心化が進んでいくという話をしたが、人間力のようなところから中心化が進んでいき、認知能力にいけばいくほど評価は難しくなる。評価や評定は学力で測っているということで、算数ができないことと、人間的な評価は全く違う話だ。別に算数ができてなくても人間として駄目だというわけではなくて、あくまで学力で測るとこうなるのだと、その部分をしっかりと分けてあげる必要があるだろう。

人間像を描いてそこを目指し過ぎると苦しい子がでてきてしまう。中心化の動きというのは、日本の教育の人間力を高める総合教育の良い面はあるにしても、そこが行き過ぎてしまうと、みんな違ってみんないいではなくなってしまふ。非認知能力は本当に不思議で、ポジティブであるということは実は問題が発見しづらく、ネガティブな人間の方が問題を発見できるという見方もできる。我慢強いというのは、逆に言うと諦めが悪いという意味でもあると思うので、ケースに応じてどのような対応ができるかということを考えていかなければいけないと思う。

○加藤委員

今の話に関連して、ネガティブさを抱える力が大事で、表面的に良い子であることがかえって子どもを苦しめている現状を是非分かってほしい。非認知能力の中で、ネガティブでも何とか持ちこたえて、自分や他人を信じて何とかやっていける、色々なことがあってもやっていけるという力が一番大事だ。子どものあるべき姿みたいなものをあまり抱えて欲しくないと私も非常に感じている。

○益子委員

私自身も教員養成をしているので、現在の学校の教育システムがどうすれば先生のおっしゃったような学校になるかということに興味がある。現在の教育システムは、教育内容や方法がかなり統一されているので、全国どこに行っても同質の教育が受けられる。どこに転校しても、同じクオリティの教育が次の日から受けられ、その予算もある。その中で、個別最適化が大切だということは皆理解しているが、そこに振り切れるかというと、実は双方のバランスがとても大切なのではないかという気がしている。探究や自己決定をする時間をいかに確保するかという点も確かにあるが、多くの学校は 1 年間 35 週の授業の中で探究に割り当てられるのは週 2 時間程度である。その時間で子どもたちの個別最適能力

を伸ばし、自己決定、探究する力を伸ばすには、やはりその基礎基本をきちんと教えるということも大切で、こちらも両者のバランスが重要になる。これまでの日本の学校の教育システムにも良いところがあったが、不登校の子どもの数がこれだけ多いというのは、やはり変革が求められているからだろう。現実的な選択肢を少しずつ進めていくことが今学校でできることかと思う。岐阜市の例にもあったが、異なる学校団体の教員同士が協力して繋がりを見つけていくとか、子ども同士の活動の連続性の中から系統立てていくとか、学力調査の結果点数の伸びから特定の層にフォーカスを当てて教育方法を考えるとか、少し変わった観点で一步踏み出すことは今の学校の現状から個別最適化の方へ進んでいく1つの道だと感じた。

○金子 氏

おっしゃる通り、学校の授業は素晴らしいと思っている。なぜならここまで日本の子どもたちの学力がついているのはその授業があるからである。どんなに授業が良くてもおそらく50点以下の子は出てくるだろう。問題はその子たちをどうするかというところがポイントだと思う。1つは平均点が80点だけれども、ここだけ150点といった何かに特化した子をどうやって作っていくか、その時間をどう確保していくかということだと思っている。それと同時にそれを全て学校のみではできないだろうと思う。渋谷区のように午前中教科の授業をして、午後は全部探究の時間のような形に切り替えていくとしても、子どもたちの無限の学びにはならない。やはり地域とか家庭の教育力をどのように上げていくかが重要な範疇になってくるだろうと思う。学校の先生との研修の際には、教科の時間はしっかり、探究は適当にやってくださいと伝えている。まずは教科の授業をしっかりと行い、教科が面白いと思えることが基本になるはず。数学の点が下がると別だが、探究は失敗しても良いから思いっきりやりたいことをやったらいいと思う。ただ学校だけで探究を行うことは難しい。部活動の地域展開のようなことも、まさに子どもたちに探究的な活動を放課後に思いっきりさせてあげる状況をどうしたら作れるのかということを考えねばならず、学校の先生がそこまでやっているから部活動が大変になるし、部活動を指導的に行いすぎているということだ。国語という教科がサッカーに変わっただけのような活動が放課後に行われる。本来は、サッカーをやりたい子どもが活動しているのだから、指導ではなく自分たちで探究する時間を作ってあげることが大事だと思う。それが学校の中でなくてもよいのではないかとということが部活動の地域展開で、学校から子どもを解放する時間をいかに作ってあげるかということが、探究的・個別最適な学びの重要な権利だと思う。ただ、そのまま放っておいて子どもたちが学べるかというところではないので、伴走できるような状況をつくってあげることが大事で、または認知心理学を理解して、この子はなぜ理解できないのかということに寄り添うことができる人を手配できるかということがポイントになってくる。学校の先生たちは授業をすることが仕事だと思っているので、いかに面白い授業をするかというところにどんどん注力してくれた方が良く、いかにそれ以外のところに子どもの学びを作っていくかが肝だと思う。

○小森委員

中核的概念の理解が重要であるという点に非常に共感した。弁護士として法教育に力を入れているが、「憲法にはこういうことが書いてある」という知識ではなく、考え方を身につけることが大切である。そのことはかなり現場にも取り入れられてきている。例えば「対立と合意、効率と公正」の概念を押さえられていると、大人になったときに、予算配分や税の負担配分の話も同じ概念で説明できるということがわかる。また、幼少中それぞれで、別のコンテンツを学習するときにも、実は同じ物差しで考えられるという学びを大事にしていくことが、本日のテーマとの関連でも重要だと改めて認識した。

2点お伺いしたい。1点目に、中核的概念の理解について、教育では成果とそれを裏付けるエビデンスが重要であるから、中核的概念を身に付けられたかを評価しなければいけない。どのような方法であればそれぞれの発達段階において中核的概念が身についたと評価できるのか、評価方法についてお考えがあればお聞かせいただきたい。

2点目に、幼少中の9年間で見たときに、リセットされない連続性が担保されることがこれからのあるべき枠組みの1つだと思う。一方で、幼稚園の段階で既に身に付けるべき能力が備わっており、幼稚園での生活に飽きてしまう子が出現したり、あるいは小学生でまだまだ能力が足りずに内容が難しいと飽きてしまったりと取り組めない子がいたりする。伴走者としては、幼稚園から中学校において先生が異なるという前提で、どのように個別性に対応していくと、それぞれの子どもたちに応じた伴走をしていけるのかお聞かせいただきたい。

○金子氏

中核的概念の評価は非常に難しいと思っている。個別に対応できるのであれば、色々な知識を学んだうえで、それを他にも転用できるようなことを問題として解いてみる、コンテンツだけ理解していくと間違ってしまうような何か問いを出してみるといったかなり難しいことが恐らく出てくる。今、子どもたちの記述や発言した内容をAIに分析させていくと、テストという形ではなくて日常の中での概念理解みたいなものがひょっとしたら見えてくるのではないかということを実証実験しているが、実際にAIに10分程度の会話を聞き取らせて、非認知能力の評価規準のようなものを組み合わせることでその子がどのような非認知能力を発揮していたかということ进行分析させると、個々の発言から見事に分析結果が出される。もう1つ、社会の記述を国語の評価軸で評価させていくという実験を行った。社会の先生は社会の観点でしか見ないが、実はこの発言だとか技術全てにおいて、色々なものの概念が実は出現しているはずで、テクノロジーを使うことでそれを分析できる可能性はあると思っている。ポートフォリオみたいなものを分析していくと、実はテストをしなくても概念が身に付いてきていることが生活の様々な場面で滲み出ていることが分かり、日常生活の中で、実際にその概念が使われている可能性はあるだろうと思う。

幼小の切れ目というところもあるが、小学校でも担任はずっと一緒ではないので小学校の中でも切れ目がある。それはなぜかというと、先生はずっといる人ではない。かつ地域の人ではない。先生はある学年でたまたま自分の子を担当してくれる人であって、学年が上がると違う人が担当するので、当然ここにも切れ目が出てくる。引き継ぎが行われることも重要だが、ずっとその子を見てられる人もいるの

は、実は学校ではなくて、地域や家庭であるから、学校の先生と家庭とか地域が連携しながらフォローしていくべきだ。先生もスーパーマンではないので 35 人分の理解もできないし、そもそも去年自分が見ていなかった子の評価を確実にできるわけでもない。そこはやはり地域家庭との連携が重要で、家庭の教育力や地域の教育力をもう一度しっかり定義して、行政は施策を持っていかないといけない。教育政策というと学校教育の政策になるのだが、本当はもう少し生涯学習とか、地域教育にも目配りをしていく必要があると思う。

○伊藤委員

主体的な学びについて、経験と学業が高度に統合している子は一番理想であるが、ごく一部ではないかと肌で感じている。それは学業が旧態依然で、教科書通りの授業をしていたり、点数主義であったり、もっと言えば毎時間事授業評価をされたりとか、あるいは同調圧力的な答えを求められたりといった中で主体的な学びと学業をどのように連結していくかが課題かと思う。小学校の頃はそのあたりの親和性があるかと思うが、中学に入るとそれが切れてきてしまう。これはやはり中学の学業優先ということから繋がってくるのではないかと思う。小 1 ギャップという話が日頃から出ているが、私自身は中 1 ギャップの方が強く感じているところだ。学習の進め方が急激に速くなり、点数も明確化されてついていけなくなってしまう。今週の定例会で全国学力テストの結果が出ていたが、やはり点数の低い層もかなりおり、その子たちをどうしていくかということは大きな課題の一つだと思う。定例会でも述べたが、やっぱり問を立て続けるというのは子どもでも大人でもずっと死ぬまで大切なことだと思っており、今は日頃から先生が問いをたて子どもたちが答えるという授業や学びが増えているのではないか。問いを立て続けていくことによって、段々と深い問いにしていき、深い問いを解くためには、深い学びをしなければいけないという繋がりを持たせられるような教員指導が一番大切ではないかと思う。子どもたちが戦争について学ぶ中でも、小学校の頃の戦争時代の食べ物は何だったかという問いから、学年が増すにつれてどうして未だに世界中で戦争が起こっているのかとか、宗教観の違いだとか、そういった自分で問いを見つけられるような子を育てていきたいと思う。ただ、現実的には問いを立てて自分で答えを見つけられる子が育ったとしても、学業的な教科の点数が低ければ、学校も保護者もなかなか認められない状況の中で、概念理解ができれば 50 点 60 点でも良いという頭になかなかないのではないか。中 1 ギャップを受けて、最初の間テストで自分の子が思うように点数を取れなかったことに親がショックを受け、地元の塾の説明会に母親同士が会うという笑い話もよくあり、慌てて塾に通って点数を上げようとする現状をどうすればよいかと感じているところだ。

夢中になれる遊びについても、今の子どもたちはゲームやスマホになりがちだ。豊明市の条例での 2 時間の使用制限は私も衝撃的であったが、そこまで制限しなければいけない現実もあり、ゲームやスマホの楽しさで大切な時代を過ごしていくことは何とかしなければいけないのではないかと感じる。以前、教育長がリアルな学びが一番大切だとおっしゃっていたが、ゲームやスマホといった目の前の遊びに向かってしまうという現象を、何とかできないかと思う。

○金子氏

学校の仕組みとして、知識技能を一定程度伝えなければいけないので学業優先のようなものは当然あると思う。文科省はかなり世論を気にしながら教育政策を立てており、例えば、ゆとり教育の際に、学力が下がって猛烈なバッシングを受けたので方向転換したわけである。つまり、結局学業を優先しているのは学校ではなくて、社会だ。良い大学に入って良い企業に入るという既定路線はとうの昔に崩れているのに、社会側はまだその感覚でいるということが原因で、先ほど述べた 50 点 60 点でも良いという考えを社会側は許していないということだ。これは良い大学に入ることが成功者だというような話と結びついている。公教育の一番大事な点は、成功者を作るのではなく、不幸でない人、不幸でない状況をつくりだすことであり、それは親の役目でもあると思っている。それぞれの幸せの在り方も異なるから、そこから先どう幸せになるかは自分で考えようという話だと個人的には思っている。それぞれの幸せの在り方は自分で考えなさいというような社会になってくるとよい。今の社会はそうになっていないので、学校は学力をつけようとするのだろう。以前よりは学歴社会ではなくなってきたとはいえ、保護者や企業側が別に学力が高い子を採用するのではないということをもう少しはっきり示さなければ、おそらく学校教育は学業優先から逃れられないと思う。教員は責任感の強い人達なので、親から言われれば責任を持って高校入試を乗り越えられる学力をつけてあげさせたいということかと思う。

学校教育において、全ての子どもの中から出てきた問いをベースにして授業をすることは不可能だ。35 人の中に 35 の問いがあり、それを授業化することはほぼ不可能なので、先生方が一定程度問いを示しながらインプットしていくのだが、良い授業は最終的に問いが残る授業だ。教えきるのではなくて、子どもたちの中に何か問が残っていたら次に探究的なものに向かうのだから、いかに問を残してあげるかが大切だ。ただ、100 点にしようと思ったら教え切らないといけないから、やはりそのハードルを下げて、教え切らなくてもよいというようなことがあるとよいし、そこで地域や家庭が子どもの問いに寄り添ってあげることが重要になってくる。

ゲームやスマホの問題は本当に難しく、ICT は学びには限定的に使うべきだと思っている。というのは、例えばアプリを使ってポスターを作らせたところで、その子のポスターを作る能力が上がるわけではないということだ。成果物は良いものができても、子どもの能力が伸びたかどうかという観点で見たら、アプリが作ったのであって子どもが作ったわけではないので、子どもの力は全然伸びていない。テクノロジーというのは、基本的に人の能力を代替するもので、計算機を使って九九を学ぶことはできないように、概念理解の手段を考えなければいけない。子どもにどのように ICT を活用させていくか、あくまでも子どもの能力が伸びるような使い方をしないと能力も伸びない。そういう使い方をしてはいけなくと学校現場の先生方も理解できてきた。ICT に関してもやはり一定程度限定的にしていかなないと、AI の使用は思考を停止させる可能性がある。安易に子どもに AI を使わせるのは問題があるのではないと思う。視点が広がるとか、そういったことであればよいが、その段階に達してない状態で渡してしまうと全く考えなくなってしまう。実は、中学校の技術の授業では、今でものこぎりの実技がある。そんな技術はもはや大工でもあまり持っていないが、そこを経験しておかないとそもそものこぎりの構造を理解できないから学習している。簡単に電気のこぎりを渡してしまうと、基本的な基礎技術は学べない。そういったことを考えていかなければいけないと思う。

○岡本委員

学校というのはプロセスを学ぶところであって、必ずしも成果だけを身につけるところではないと思っている。私自身も概念化することは苦手で、どちらかという具体的な経験を多くして、そこから身に付けていくということをしてきた。お話を伺いながら、私は幼少期から自分のやりたいことや好きなことを学校でも多く行ってきたことを思い出した。それは特に、担任の先生にも好きなことをやってそれをもっと理解して教えてねと言われており、自分の好きなことを先生に認めてもらいながら、自分を表現できる機会があったからではないかと思った。好きな事を繰り返しながら、できたら次はこれやってみようというように、先生がおそらく考えられていたのだろうと思うし、今思い出すとそうした遊びから色々な学びがあった。

幼小中の連携の中でよく言われる実体験の少ない子たち、特に幼稚園で泥にまみれていたのが小学校で急に無くなっていく中で、実体験としての遊びをカリキュラムにどう取り入れて概念化させながら座学の方に導いていくのが、連続性の中で重要になってくるかと思う。市の資料の中にもリセットがかかるという言葉があったが、実はリセットというよりも、そこでできているということを前提として、戻らずに次に進んでいるのではないかと思う。できてない子どもは、もう一度そこで振り返ってやり直すということが、うまくできないままどんどん先に進んでいくので、色々なことができなくなってくるのかと思う。教育はどうしても積み上げ方式で、生まれもった人間の能力はそんなに変わっていないはずなのに、10歳15歳になって求められることが年々難しくなり、今大変高いレベルのものを求められている。とすると、その間に学ぶべきものが高度化して量が増えている一方で、使える時間は一緒であり、教える側も大変だ。50点60点の理解でよいとすると、毎年50点の理解をしていった場合に、その翌年にできることが狭まって行って、これが9年間経つと、9年目にできることがほとんどなくなってしまうのではないかと思い、社会では50点60点の理解をなかなか許容できないのではないかと感じる。

2点お伺いしたい。1点は、遊びという部分の連続性で、どのようにして子どもたちに伝えていくか方法があれば教えていただきたい。もう1点は、連続的な学びの中で、先ほど述べた最後のひずみがどうしても来てしまうとすると義務教育としてはどのあたりまでどう担保していくべきか、何か基準があれば教えていただきたい。

○金子氏

遊びに関して、例えばコミュニケーション能力をつけるために鬼ごっこをする子はおらず、鬼ごっこをしているうちにコミュニケーション能力が身につく。教育は、常に何々力をつけるために何をするという文脈で考えるが、遊びの場合は何かをしているうちに何かが学べたという順序になる。実は、体験的な学びは振り返りがないと学びになりづらいので、大人側の役割は、それを学びとして価値付けてあげることが重要であり、鬼ごっこをしていて上手く話ができるときに、上手にできたねと価値付けてあげるとは、今までの学校の先生が子どもたちに行ってきた評価と真逆で、どう学びの価値付けをしてあげるのが重要になってくる。それがまさに伴走であり、その考え方を覚えていくといいよとか今実験になっていたねと価値付けることが遊びの中での学びである。ただ、それだけでは学校教育が成り立

たないので、一定程度授業が必要で、ある程度の知識を活かしてもらうことは必要だと思う。

探究的な学びの大きな変革点として、経産省は STEAM という言葉を使っていて、創造と探究を往還させる学びだと定義している。探究というのは、このバッタはどうしてこんな高く飛べるのだろうと考えることで、今まで学校が行ってきたものだ。創造は、飛べるバッタの仕組みを使って自分がもっと高く飛ぶ仕組みをどうやって作るのだろうかというもので、探究的な学びは、ただの調べ学習や何かを理解することではなく、自分で実際にやってみる、何かを作ってみるとか、何かの価値を一つ創造してみることが組み込まれようとしている。リアルな体験が大事と伝えたが、遊びは成功と失敗がはつきりしている。これまで学校では、調べているだけだから失敗もなかったわけだが、実際にやってみると失敗が出てくる。創造したときに初めて失敗ができて、失敗したらなぜ失敗したのだろうと次の探究が始まる。それがまさに探究と創造の往還で、単純に調べ学習をして、きっとこうすると良いと思いますなどと発表しても失敗がなければそこに往還が起きないので、実際にやらせてみるということは大変重要になってきている。

積み上げ式の科目は、個人的には算数数学だけだと思っている。国語や社会は結構分野が違っているので、どこかでつまずいても何とかフォローがきくが、数学に関しては本当にフォローがきかない。理解できていれば次に進めるようにしていくことが概念的理解で、今後はそっちの方に力を寄せていくことになっていくのだろうと思う。まさにおっしゃる通り、コンテンツ全てを理解していなくても、次のステップで理解できるくらいに分かっていることが特に数学に関しては重要になってくる。国語等は中核的概念が何度も何度も繰り返されていくので、基礎的な読解力を除いてはどこかでフォローされるものだと思うが、何かそんなことがあったなと思いつかぶぐらいにはなっていた方が良さだろう。それは、物事を考えるときに何も思いつかばなかったら、創造も探究もできないからだ。例えば、曲面を作るにはサインコサイン必要だったと思えたら、曲面を作るためにもう一度勉強しようという話にもなる。先日、釣りが好きな生徒との会話で、80m のおもりを作りたいということになり、物理を勉強しておこうと話した。そうすると、当然物が飛ぶための流体力学を学ぶ。この角度でこのスピードでこの形のものを飛ばしたから 80m 飛ぶという話で、まさに探究的な学びはそういったことが起きる。何かやろうと思うと、物理がないと出来ず学ぼうということが出てくる。ただし、流体力学という存在を思いつかべなかったらそこにたどり着かない。その切り口を知っていることが重要で、伴走者はその目次を示してあげることが一つの役割ではあると思う。

○教育長

岐阜市には学びの多様化学校の草潤中学校があるが、もともと不登校であった子が 8 割出席している。その構造と P. 69 のスライドが大変近似しており、ありがたいと感じた。

授業指導をすると先生方は評価基準を記載するが、教師にとっての評価基準と子どもにとっての評価基準は全然違うということが鮮明に分かった。B、C 評価といった言葉の問題ではないということが分かっている、良い授業はできない。

学校の在り方は変わってきているので、非認知能力の話もあったが、体験させること、例えば見る、触れる、匂いを嗅ぐ、育てる、続ける、失敗する、やり直す、工夫する、集める、聞いてみる、調べる

といった営みを先生がきちんと伴走してあげると、その中にある子どもの良さや伸ばすべき点が見えるから、それを見逃さない教育をこれから新しい学校で展開しなければいけないということ教えていただけたと思う。

○市長

教育長がおっしゃっている自己決定理論は、草潤中学校そのものだと思う。子どもたちがそれぞれの自分の学び方とか生き方を彼ら彼女たちなりに考えてやっており、自己決定できることによって起きる安心感や、自分なりに学ぶことを実感できるということがまさにあると思う。草潤メソッドという言い方をするが、草潤中学校で取り組んでいることがいかに横展開できるかということを我々は課題と受け止めており、今後も自己決定理論を大事にしていきたい。

（１５時３０分閉会）